

歯科衛生学分野の研究に携わる女性研究者ならびに 若手研究者へのエール



公益社団法人日本歯科衛生士会 会長
国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
吉田直美

【略歴】

- 1960年 東京都生まれ
- 1982年 東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業
- 1982年 東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科衛生士
- 1998年 東京都立大学都市科学研究科修士課程修了修士（都市科学）
- 2003年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程修了博士（歯学）
- 2004年 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科講師
- 2009年 千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科教授
- 2017年 国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授（現在に至る）
- 2021年 公益社団法人日本歯科衛生士会会長（現在に至る）

人生 100 年時代、私が歯科衛生士として、また歯科衛生教員として、歩んできて 40 年が経ちました。今後どのくらい社会や歯科衛生学分野の研究の発展を見届けられるかは分かりませんが、この 40 年間に社会状況や歯科衛生士の教育研究環境は大きく変化しました。今後も歯科衛生士の研究は発展を続けることと期待しています。歯科衛生学分野における若手研究者、女性研究者の方々へ、私の経験から研究について考えたこと、感じたことをお伝えしたいと思います。

○研究を始めた経緯と研究環境

大学病院の歯科衛生士として働き始めてすぐに、鶴見大学から戻られ教授になられた大山喬史先生を診療科長とする顎口腔機能治療部に配属されました。口唇口蓋裂のスピーチエイド、言語治療、矯正治療後や口腔がん治療後の補綴治療等を行う外来です。口腔がん患者は口腔衛生状態が不良なことが多く、侵襲が大きい手術を受けた後や小線源治療前後の口腔衛生管理などを担当しましたが、患者さんの様々な心理状態に触れる機会が多く、どのように寄り添うべきか考えさせられることが多々ありました。医局会や抄読会、予演会に参加する中で、自分の興味がある研究論文を検索して読むことは当然のことだと思えるようになりました。勉強を進めるうち、自分の知識不足を感じ、理系大学へ進学しなおしました。大学では異なる分野の講義や基礎実験などを楽しみました。特に実験では、歯科衛生士の業務経験を活かすことができ、試料の計量や機器の取り扱い、準備、片づけなど人一倍手早く行えました。歯科衛生士の業務上のスキルが基礎実験等にも役立ち、どんな経験も無駄にならないと実感しました。自ら学ぶ必要性を気づける環境に身を置き、行動したことは、

その後の人生に大きく影響していきました。

研究に着手したのは、当時歯科衛生士学校の校長だった黒崎紀正教授（兼任）からお声掛けをいただき、病院歯科衛生士から専門学校講師へ異動してからです。遠藤圭子教務主任に連れられて勉強会に参加し、医業経営コンサルタントの植木清直氏にお会いしたのが切っ掛けで、歯科治療中の患者さんの心理を調査し論文をまとめました。その一方で、何か物足りなさや自身の知識不足を再び感じ、修士課程への進学を考えました。当時、社会人のための修士課程がある大学はとても少なく、ようやく見つけた東京都立大学大学院都市科学研究科修士課程に進みました。星 旦二教授の教室で学び、必要な統計手法や院生同士の議論など、充実した時間を持つことができました。修士論文は、大学病院と歯科診療所で調査を行い、患者が医療機関へ継続して受診する要因を分析した結果をまとめました。この研究で調査対象の歯科診療所をご紹介いただいた植木先生は、その数年後に急逝されてしまい、指導していただく方を失ったことが残念でした。この経験を通して、大学院で学ぶことの重要性や研究の実施には様々な人の助けが必要であることを実感しました。

修士課程同期の食品衛生監視員や保健師の方々は、修士課程に飽き足らず、当然のように博士課程への進学を希望しており、自分はどうか迷っていた頃、黒崎紀正教授からのお話で海外赴任することになり、進学は一旦諦めました。

私にとって、修士課程は、多くの学びはもちろん、同期や他分野の保健医療職種に触発される機会となり、海外での勤務経験は、多様な文化・価値観を理解し受け入れるという姿勢を身につける機会となりました。若いうちは特に、大学院や異文化における出会いと経験が後の姿勢や行動、そして研究に大きく影響すると思いますので、皆さんは積極的にその機会をつくり、挑戦してほしいと思います。

○研究に取り組む中で

その後、歯科衛生士学校に勤務しながら、社会人大学院生として博士課程で研究を行いました。某大学口腔外科教授と同席する機会があり、その先生がある統計学の専門書をお持ちだったので、「その本、今私が読んでいる本です。」とお伝えしたところ、「貴女、変わった歯科衛生士だね」と言われました。その時は、必要だから読んでいるので、特に変わっているわけではないと思いながら、笑って聞き流しました。当時は、博士課程に通う歯科衛生士はほとんどいなかったもので、そういう印象を持たれたのかと思いますが、周りの目や言葉に惑わされずに、自分の価値観を持ち、前に進むことが大切だと思います。

東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科の杉本久美子先生とは大学教育を開始した時の初期メンバーとしてご一緒しました。その後、千葉県立保健医療大学に異動してから、杉本先生とは共同研究を実施する機会が多くなり、地域在住高齢者を対象とした口腔機能向上訓練の介入や、更年期の歯科衛生士と一般女性の口腔健康状態の比較や健康教育介入など、多様な研究を行い、海外の学会で発表する経験も増えました。唾液や血液成分などの客観的指標を用いた研究や介入研究は、少人数ではできず、チームを組んで取り組まなければならないため、多くの共同研究者の皆さんに協力していただき、ネットワークの大切さを実感しました。このネットワークは今でも、勉強会などの形で継続しています。

○転機となった出来事

振り返ってみますといくつかの転機がありました。東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科衛生士

となり、顎口腔機能治療部に配属され、大山喬史教授をはじめ、その治療部の先生方と出会ったのが第1段階です。そのお陰で自分の課題に気づいて大学へ行きなおし、研究に必要な基本的なスキルを習得し、次の段階へ進む準備ができました。

修士課程に入学し、東京都立大学大学院都市科学研究所の星 旦二教室で学んだことが第2段階。星先生は医師で公衆衛生の専門家でしたが、都市科学科は工学系・社会学系など様々な研究者の集まりで、ここで様々な研究スタイルを知り、基本的研究スキルを身に付けることができました。

博士課程に入学し、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科全歯科医療行動科学分野の俣木志朗教授の下で学んだのが第3段階です。学位論文を執筆し、英文雑誌、和文雑誌に投稿し、査読者とのやり取りなどを経験し、研究者としての第一歩を踏み出しました。

私のように社会人になってから、自分の課題に気づき、自分の知識や技能を向上させるために進学するという道もありますが、就職せずに修士・博士課程に進学して研究者への道へ進むことも良い選択だと思います。長い人生、思い立ったら動くことで、いろいろな道が開けます。

○影響を受けた人・言葉

大山先生はいつもやろうとすることに背中を押してくださった上司です。大学に進学したことも、修士や博士課程での研究できたことも先生のおかげです。大山喬史先生からは、論語のお話をよく伺いました。自分の良心に忠実で、他人への思いやりが深いことを意味する「忠恕」という言葉が頭に残っています。大山先生のように誰に対しても忠恕の姿勢をとることはまだまだできておりませんが、医療者としても教育者としても心掛けたい言葉です。

黒崎紀正先生は、就職した前年に開設された歯科総合診断部の教授で、皆でマラソンをするなど体力づくりの機会や周囲との楽しい関係をつくっていただきました。歯科衛生士学校への異動も海外赴任も黒崎先生からいただいた機会です。研究に携わる道の入り口に立たせていただきました。沖縄や海外へ派遣された際には、赴任先に様子を見に来てくださり、機会を与えるだけでなく、現地で困っていないか思いやってくださいました。

博士課程でお世話になった俣木志朗先生は、私のやりたいことを自分のペースでやらせてくださいました。いまだに、日本歯科衛生士会の研修でお世話になっています。

杉本久美子先生は、薬剤師資格保有の基礎研究者で、研究や教育への探求心が深く、後進を育てようという姿勢が素晴らしい方です。共同研究にお声掛けいただいたり、私が取得した助成研究に参加いただくなど、共に多くの研究を実施しながら、様々なことを教えていただき、支えていただいています。

ここには書き切れないほど、色々な先生方にお世話になりましたし、今もお世話になっています。指導者となった今日、お世話になった一部でも若い研究者への支援としてお返ししたいと考えています。私が研究への一歩を踏み出した頃は、歯科衛生士の大学教育が開始されておらず、歯科衛生士が選択できる大学院もほとんどありませんでした。私にとって転機となった修士課程や博士課程への進学は、先達がおらず、自分で切り開かなければなりません。歯科衛生学分野の学会もなく、富徳会のような助成金制度もありませんでした。現在は、歯科衛生分野の大学院も増え、富徳会をはじめ多くの方々に支えられて、歯科衛生士のための研究環境が整ってきています。研究マインドをもった歯科衛生士が増え、素晴らしい研究成果を見られるようになってきたことは、喜ばしい限りです。

相田みつを氏の言葉で「道はじぶんでつくる 道はじぶんでひらく 人のつくったものはじぶん

の道にはならない」があります。この言葉は、研究者だけではなく、歯科衛生士の皆さんに送りたい言葉です。人に作ってもらうのは楽ですが、それではいつまでたっても自分の道になりません。研究への心構えとしてももちろんですが、歯科衛生分野の発展のためには、歯科衛生士が主体となって自分の道を創るしかないのです。

最後に、論語にある言葉「学べばすなわち固ならず 知らざるを知らずとなす これ知るなり」を若手研究者の皆さんへ送りたいと思います。学ぶことで視野を広げ柔軟になることや、知らないことを知らないと自覚することが成長に繋がっていくと思います。皆さんの研究者としての取り組みにエールを送り、さらなる活躍を期待したいと思います。